

「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクト実践研究協働校事業

☆後期授業研究会Ⅱ（外国語科）☆

10月26日(木)は、標記の外国語科授業研究会が行われました。9月の教材研究会を受けて、中学校への接続を考えた小学校段階における資質・能力の育成、目的の明確化、外国の文化や生活への意識、ALTの活用の仕方など、再度、単元構想や本時の授業について検討し、「ALTの母国の料理を給食メニューで実現すること」を目的に、外国の文化や生活に触れられる単元としました。本時の授業では、ALTの母国の料理と合わせて、一緒に栄養バランスを考える際に、どのようなことを聞くとよいのか、既習や必要な表現を考え、やり取りの練習をする学習を行いました。

単元名 「Let's think about our food.」 全8時間
学習材 「ALTの母国の料理を知ろう」

6年2組 横内 悠

本時の目標：ALTの母国の料理を給食メニューで実現するために、相手の好みなどを尋ねたり、答えたりして伝え合うことができる。

本時における見方・考え方：ALTの母国の料理を給食メニューで実現するために、もっと聞きたいことや使えそうな表現について考えながら、やり取りをしている。



教師とALTによる
スモールトーク



母国の料理の栄養バランスを分析したことをもとに、足りない栄養素は (Red, Yellow, Green group) 何か補うものを考えます。

ALTと給食メニューを考えるために、聞きたいことを考え、給食の献立を使ってペアでやり取りの練習をしています。



ペアでのやり取りの練習をもとに、実際に、ALTと母国の料理について、やり取りをしています。



授業参観の視点(2点)に沿って、グループ協議を行い、全体共有をしました。(抜粋)

①外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせて、課題解決ができる学習過程・学習活動になっていたか。

②児童が主体的にコミュニケーションを図ろうとする授業になっていたか。

<研究協議より>

○給食メニューについて、ALTと一緒に考えるために、ALTとのやり取りを1回だけでなく、再度来校してもらいやり取りができる単元ゴールの設定がモチベーションにもつながりよかった。

○「ALTの母国の料理を給食で実現する」という目的、めあてを教師だけでなく、児童に意識させながら学習を進めることができていた。

○児童の困り感を共有しながら、ALTにどのようなことを聞くとよいのか、児童から引き出しているのがよかった。

○ペアで相手を変えながら、友達とやり取りする活動が多く設定されていて、やり取りの中で表現を高めていくこととする構成がよかった。

○既習の表現が児童から出たり、児童の反応、あいづちなど主体的にコミュニケーションを図ろうとしたりする児童の姿が多く見られた。

○外国の母国の料理などの写真の提示、給食の献立表、ALTと教師とのやり取りのモデル、児童がやり取りをする動画の撮影など、ICTを効果的に活用することができていた。

▼栄養バランスについて、野菜などのグリーングループの食材が足りないという場面が多く、表現の広がりが見られなかった。他のグループではどうか、味付けなどについても考えていけるようにしてもよかったのではないかと。

▼「もっとこんなことを聞きたい」ということを子どもから引き出していきたい。

▼児童が表現する中で、正しい表現についてALTを活用しながら身に付けさせることも大切。

▼児童とALTとのやり取りを増やしていきたい。

高知県教育委員会 小中学校課 齋藤指導主事より

○外国語科における言語活動とは、英語を使って、自分の考えや気持ちを表現すること。

○目的・場面・状況がクリアになるほど、見方・考え方が働く。

*思考を働かせる場面をつくるのが大切。

○ALTやICTの強みを取り入れる。

*ALTの文化的背景を生かし、児童の興味・関心を引き出す。

*やり取りの動画を撮影し、言語活動の充実と指導・評価の効率化を図るなど

○小学校の「その場」でのやり取りの経験が、中学校の「即興」で話す力へつながる。

○「Do-Learn-Do Again」

言語活動→中間指導→言語活動→中間指導を繰り返しながら、資質・能力の育成を目指すことが大切。

授業者のリフレクション

この授業研究会に向けて、中村中学校と協働で英語を話す必然性のある本物の活動づくり、スモールトークの充実、対話を続けるための表現の定着を図るために、「やり取り」の活動を選択し、研究してきました。何のためにその「やり取り」をするのかという目的意識や、誰に向けて話しているのかという相手意識を子どもたちが明確に持ちながら、繰り返し「やり取り」を行ってきました。今回の授業でも、子どもたちが既習表現や必要な表現を使って発話できるように何度も「やり取り」を行いました。

授業後の研究協議で頂いた意見の中に、一部の子どもたちの意見のみが反映されていたとあったので、今後は子どもたちから多様な意見を引き出し、子どもたち全員が主体的に「やり取り」ができるように、児童の思考を促す発問や形態を工夫していきたいと思いました。

小学校外国語科では、外国の文化や生活などを意識するとともに、外国語でコミュニケーションをする必要性をもたせること、既習の表現を活用しながら表現を高めていくことで外国語によるコミュニケーションの基礎を養うことが大切であると学びました。中学校への円滑な接続に向けた資質・能力の育成を目指していきましょう。